

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 21 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770076

研究課題名(和文) 夏目漱石初期・中期作品における表現の視覚性

研究課題名(英文) A study on the visuality of the representation in the novels of Soseki Natsume

研究代表者

神田 祥子 (KANDA, Shoko)

東京大学・人文社会系研究科・助教

研究者番号：50632452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：夏目漱石の小説作品における「表現の視覚性」について、造形表現から漱石が言語表現に取り入れた要素を中心に、その性質を明らかにした。漱石の蔵書における美術関連書籍の書入れから、主にラファエル前派についての関心を分析するとともに、「草枕」から「三四郎」に至る時期の画と詩概念および「断片的文学」の変遷と、作品内容との関連について、その発表媒体や作家としての立場の変化を含めて、多角的に考察した。

研究成果の概要(英文)：This paper focuses on “Visuality of the Representation” in the novels of Natsume Soseki. Its purpose is to elucidate the characteristics of the visuality by investigating how he adapted elements of the formative (plastic) arts for his poetry (or literature). The following approaches were employed: (1) analyzing his interest in schools of paintings, especially Pre-Raphaelite brotherhood by investigating his memorandums found in his collection of books about arts and paintings; (2) considering the transition of his notion about correlation between “Paintings (plastic arts)” and “Poetry” and that of his “Partial Literature” from various angles ranging from his novels like “The Three-Corned World (Kusamakura),” “Sanshiro” to the changes of Soseki’s career and his place.

研究分野：人文学

キーワード：日本近現代文学 夏目漱石 視覚性

1. 研究開始当初の背景

(1) 漱石の「文学」概念と他分野の学問との関連に関して

漱石の科学観、美術への関心、西欧文学・文化への関心は、科学・美術・比較文学の各分野から有益な指摘がある。

・科学的側面に関して

漱石の「文学」概念については、その概要を示したものとされる講義録『文学論』(明40)を中心として、その科学的側面が検証されてきた。

・美術的側面に関して

美術(造型芸術)と「文学」(言語芸術)の類似点、相違点を漱石は『文学論』で指摘し、両者の互換を試みた形跡のあることが指摘されてきた。

・比較文学的側面に関して

「文学」概念の可能性を、漱石自身が実作品を通して追求しようとした痕跡は、特に初期作品群において顕著であり、外国文学の影響を視野に入れた概念形成が指摘されてきた。こうした視点は、漱石の「文学」が何よりも狭い言語表現に留まらない、広い学際的要素を包括し、近代日本が西欧文化との接触によるグローバルな価値転換に際して孕んでいた問題を反映していたことを指摘する上で、非常に重要なものであると考える。

(2) 「文学」概念と他分野の有機的連環に関して

ただ上記の多くが関心の所在を示すに留まり、漱石が研究・創作の両面から「文学」概念の構築に取り組んでいった過程の検証や、作品の内容・表現方法と関連づける論証はいまだ十分になされているとは言い難い。またこうした様々な要素はそれぞれ個別に取り扱われる傾向があり、それらを含む視点からの研究が漱石の「文学」概念の持つ多様性を考える上で不可欠である。こうした各分野の研究成果をより有機的に発展させる視点を獲得することにより、総合芸術としての文学の、より広範な可能性を提示するべきである。

2. 研究の目的

(1) 漱石初期作品における表現としての「視覚性」の検証

漱石は、一つの作品または、その任意の部分において含有される時間の差異から、「断面的文学」という概念を創出し、言語表現に造形表現の特質を付加しようとした形跡がある。作品内の時間を、全体として捉え

るのみならず、任意の部分ごとに捉え、その焦点となるべき瞬間に凝縮させるという、言語による「断面」を創出し、言語表現の可能性を広げようとする志向は、漱石文学の非常に特異な点と言える。本研究では、この造形芸術的かつ視覚的な表現方法の変遷と効果を検証することを通して、漱石の文学概念を分析することを目的とする。

(2) 漱石文学における表象としての「視覚性」の検証

漱石は、創作の初期から自著出版時の装丁や挿画に深い関心を持ち、担当する画家たちにも細かい要望を出していた。また大正期の「心」のように、自身で装丁を担当することもあった。漱石作品において、外見的な書籍のあり方はパッケージとして非常に重要な意味をもっており、本研究では、作品内容と外観を統合しつつ漱石の「文学」を分析するための視点を獲得することを目的とする。

(3) 漱石中期作品における「表現の視覚性」とその変容に関する検証

職業作家時代に書かれた中期作品では、初期で頻出した「断面的文学」の手法が後景化し、断片的な描写はそれほど前面に押し出されなくなっていく。本研究では、その変化の過程を検証しつつ、中期作品以後の作品表現における問題意識を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 東北大学漱石文庫における漱石所蔵の美術関連資料・自著装丁に関する調査

美術関連資料について

以下の書籍を中心に書入れ・書誌などの調査を行った。

J. Ruskin "Modern Painters" 6vols. London: G. Allen. 1898-1902

W&G. Audley "Handbook of Christian symbolism." London: Day & Son. 1865

W. Bayliss "Five great painters of the Victorian era." London: Sampson Low, Marston & Co. 1902

W. Blake "Illustrations of the Book of job." London: Methuen & Co. 1903

C. Holme "English water-colour." London: Office of "The Studio." 1902

J. Trusler "The works of William Hogarth." 2vols. London: Jones & Co. 1833

J. Hollbein "The dance of death." London: Hamilton, Adams & Co. 1887

J. F. Millet "Reproductions in 12 plates."

F. Miller "Pictures in the Wallace collection." London: C. A. Pearson. 1902

L. Cust "A catalogue of the National Gallery of British art (Tate Gallery)." London: Eyre & Spottiswoode.

"An abridged catalogue of the pictures in the National Gallery. Foreign schools." London: Her Majesty's Stationary Office. 1989

"Dante, Gabriel, Rossetti." London: H. Virtue & Co. 1902

"Royal Academy pictures and sculpture." London: Cassell & Co. 1910

"Exhibition of works by the old masters including a special collection of painting." London: W. Clowes & Sons. 1902

"A catalogue of the exhibition of the Royal Academy of Arts. 134." London: The Royal Academy. 1902

漱石著作本の装丁・挿画に関する調査
主に『漾虚集』『草枕』『虞美人草』『三四郎』について、視覚的表現と作品内容・文体の関係についての検証を行った。またこれら初版本の経年による損傷や閲覧困難等を考慮し、日本近代文学館刊行の名著復刻シリーズなどを主とする複製本を収集し、参考資料とした。

(2) ロンドン・ナショナルギャラリー所蔵品等を中心とした漱石の英国留学時代の美術受容に関する調査

美術館・資料館における所蔵について
以下の施設を中心に調査を行った。

The National Gallery, Tate Britain, The Wallace Collection に所蔵される Delaroche, Waterhouse, Millais, Greuze らの絵画作品と、『漾虚集』『草枕』『三四郎』における記述の比較検証。

The Towers of London, National trust Carlyle's House, 倫敦漱石記念館の所蔵品、所蔵カタログと漱石手沢本書き入れとの照合など。

(3) 作品の精読を通じた登場人物の造型における視覚的側面と不可視的側面の分析

「虞美人草」における「画」と「詩」の対比について

「虞美人草」における登場人物・藤尾と小夜子の人物造形および、人物描写における美文などの文体の使い分けを検証し、視覚的側面を強調した「画」的人物造形と不可視的側面を強調した「詩」的人物造形の差異について分析を行った。

また美文表現における「断面的文学」のあり方を検証し、文体における「視覚性」のあり方を検証した。

「三四郎」における「画」と「詩」の対比について

「虞美人草」執筆以来の課題であった、「断面的文学」の視覚性と長編小説の「筋」の明確化や緻密な人物造形を両立させることを、「三四郎」において漱石がどのように達成していったかを検証した。

また造形芸術の表現を取り入れた「断面的文学」の試みと、理念としての「画」のあり方が、長編小説の中で変容していく過程について、作品の精読を通し分析し、研究論文として公的に発表した。

4. 研究成果

(1) 漱石の所蔵する美術関連資料について

J.Ruskin "Modern Painters" の漱石手沢本書き入れについて

6巻本のうち、2巻、5巻、6巻に若干の傍線および書き入れが見られる。このうち、もっとも熟読の形跡が見られるのは2巻に充当する第3部「OF IDEAS OF BEAUTY」の第1節「OF THE THEORETIC FACULTY」第5章となる「OF TYPICAL BEAUTY: First, of infinity, or the type of divine incomprehensibility」であり、約5箇所にわたって傍線・下線がみられる(引用1)。

この章でラスキンは、成長に従って得られた理性や経験が人間の価値観や判断をかたちづくる前に、本能的に感受しうる「典型的な美」について論じている。その例として、子供時代に海を初めて見た記憶とその際的情绪を挙げる。漱石はその部分に傍線を引いている(手沢本43頁)。また人の視覚と印象はまず光や明るさの表現に向くものであり、それは本能的に目が美しいものを求めようとする"a deeper feeling"によるものであることをラスキンは強調する。漱石は"there is yet a light which the eye invariably seeks with a deeper feeling of the beautiful,"の部分に傍線をひき、また"there is yet a light which"に傍線を引いている(手沢本43頁)。

光や明るさの表現は、それ自体を独立させて表現するものというよりは、他の対象物に与える効果などから相対的に表現されるものである。このような例として、ラスキンはさらに「無限性(Infinity)」を挙げ、漱石もその部分に下線を引いている(手沢本44頁)。

こうした対象をもとに、ラスキンは強調するのは、このような絵画の中心主題の背景における効果のありようによって画家もまた見る側も"Escape"や"Hope"が可能になるということ、すなわち中心主題だけに焦点を合わせることから逃れる余地を作ることが絵画の望ましい(あるいは本能的な)あり方であるということになる。漱石の「断面的文学」における「全体の筋」だけにこだわらない態度は、このラスキンの主張とも通底する部分がある。漱石は写生文や低徊趣味を通し

て「余裕」という概念を打ち出し、表現者にとって、また読者にとっても中心主題だけに焦点を合わせずに読むことのできる文学作品の創出を模索している。このような文学概念への発想は、絵画の空間的・共時的表現から発想を得たものと考えられ、そこにはラスキンの「典型的な美」に対する論が影響を与えているものと考えられる。

漱石の所蔵する美術館目録・画集に関して今回調査を行った目録・画集の傾向としては、漱石の留学時代に活動を行っていたラファエル前派の画家に関するもの、またそれらの展示会・評伝などが多く含まれる。同時代の絵画を収集することを目的としたナショナルギャラリー・オブ・ブリティッシュ・アート（現在のテート・ブリテン）の開設は、漱石がロンドンに留学する3年前の1897年であり、ジョン・エヴァレット・ミレイ、ウィリアム・ブレイク、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、ウィリアム・ホガースらの作品を展示していた。漱石の所蔵中にも、これらの作家の評伝、画集、解説書などが含まれる。

W. Baylissの“Five Great Painters of the Victorian Era”(引用2)には、多くの書き込みが見られ、レイトン、ミレイ、バーン・ジョーンズ、ワッツ、ホルマン・ハントの五名についてその同時代性を意識しながら、それぞれの芸術観を理解しようとしていたことが伺える。たとえば同書41頁には「Leightonト同時ノ画家」と書入れがあり、文中の五名の名前に下線が引かれている。またレイトンがフランス絵画を、同時代のフランス画家たちによってではなく、ダヴィンチやラファエロらイタリア絵画の巨匠らの作品によって発展させてきたことを指摘する場面には「Leightonノ伝画話」として注目する書入れがある(同書40頁)。その他、ミレイが新しい時代の芸術が古い名作より劣っているとは言えないと述べる部分については「Millais曰ク絵画ハ後世ナルガ故ニ下ラズ」と書入れ、また専門家の手によらない美術論の大半は「beautiful nonsense」であるとするミレイの言にも、その部分に下線を引き「画家ナラザル話家ノ言也」と書き入れている。漱石は時代や風潮に注目する一方で、このような画家個別の芸術観にも注意を払っている形跡がある。

またロイヤル・アカデミー・オブ・アーツの展覧会に漱石は実際に足を運んでおり、1902年に開催された“Exhibition of works by the old masters including a special collection of paintin.”(引用3)では、展示目録に一部の画の印象などを丹念に書き込んでいる。また滞在中にウォレスコレクションやテートギャラリーの展示目録を購入しているほか、帰国後にも、1910年のRAOAの展示目録などを取り寄せており、英国の同時代美術に大きな関心を寄せていた様子が見ええる。

(2) 漱石の初期作品から中期作品への過渡期における「表現の視覚性」について

「草枕」以前の「表現の視覚性」に関して漱石の初期作品において、画的な美と詩的な美は、対極的な位置関係から捉えられる傾向にあった。画的な凝縮された「美」の表現と、継起的な時間の流れに従った事件の生起を表現する詩を同時に言語表現に取り込む構想が、全体と部分とを共存させる「断面的文学」の手法である。たとえば「草枕」では、それ自体が独立した漢詩や俳句、警句の類が文中に織り交ぜられ、また文章を部分的に切り取っても、ある程度の独立した作品世界が立ち上がるような構成が試みられている。最初から最後までという全体の「筋」だけに拘泥しない「非人情」の境地を、内容の面からも表現の面からも反映し得る表現方法が確立されている。また作品全体の焦点「F」と部分の焦点「F」を同時に配置することによって、様々な時間の幅を凝縮した「断面＝画面」を提示し、視覚的な表現として読者に印象づけることにも成功している。

職業作家初期の「表現の視覚性」とその展開について

しかしそうした「断面」に強い印象を付与することで視覚性を確保する表現方法は、作品全体の「筋」や、人物たちの内面の深さを掘り下げようとする詩的要素の存在感を相対的に希薄にするため、長編に応用することは困難である。職業作家としての第一作となった「虞美人草」は、様々な種類の文体によって構成される作品でありながら、主に藤尾を描写するために作中で用いられる「絢爛豪華な美文」で書かれた作品という印象を、読者にもっとも強く与えることになった。また同時にこの作品は、可視的かつ外面的に描写される藤尾の画的要素と、不可視的かつ内面的に描写される小夜子の詩的要素を対立させることを主題のひとつとしているが、藤尾が漱石の意図した以上に「新しい女」として読者の肯定的な支持を得る一方、小夜子は近代的な自我の葛藤を内包しつつも、昔風の類型的な女(森田草平)といった消極的な評価を与えられがちであり、彼女にそなわった不可視的な内面の奥行きには注目を集められない結果となった。

「三四郎」において、漱石はふたたびこの画的な要素と詩的な要素をもつ美の表現を模索し、その両立を果たしている。作中にはいくつもの部分的な「断面」と、それぞれの焦点「F」となるべき画面が含みこまれ、また全体の焦点「F」となりうるクライマックスの画になる瞬間に、物語の全体と部分が同心円的に凝縮されるという「草枕」の構成がふたたび採用される。しかし、画的要素の表現は、初期作品とは大きく

異なっており、時間の停止によって美を不変のまま留めようとする意識への限界が提起され、一方的に美の「頂点」を定めようとする権力的な視線への相対化が行われていく。画の喚起する美的情緒は、むしろ不変の一瞬を求めるためにそぎ落とされた部分への愛惜に求められていくのであり、同時に詩は時間の経過による美の劣化をもたらすものではなく、「もっと美しい」ものを求めるための肯定的な営為へと変化していく。それは、これまで漱石の初期作品において培われてきた画と詩の相克を超え、両者の新しい関係を模索するための試みとなっていくのである。

引用文献

- (1) J. Ruskin "Modern Painters" 6 vols. London: G. Allen, 1898-1902 pp43-44 による。また用語の邦訳などについては、内藤史朗訳『構想力の芸術思想 近代画家論・原理編』(法蔵館、2003)を参考とした。
- (2) W. Bayliss "Five great painters of the Victorian era." London: Sampson Low, Marston & Co. 1902
- (3) "Exhibition of works by the old masters including a special collection of paintin." London: W. Clowes & Sons. 1902

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計3件)

矢内賢二、田中裕二、森田都紀、神田祥子、新典社、『明治、このフシギな時代』、2016、p80-124

神田祥子、青簡舎、漱石「文学」の黎明、2015、全252

矢内賢二、神林尚子、牧藍子、茂木仁史、神田祥子、幻冬舎・京都造形芸術大学・東北芸術工科大学出版局、『日本の芸術史 文学上演篇 近世から開化期の芸能と文学』、2014、p149-183

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神田 祥子 (KANDA Shoko)
東京大学・大学院人文社会系研究科 助教
研究者番号：50632452